

# 大学外国語教育における“Show and Tell”の利用

——Presentation 技能養成への1ステップとして——

木 村 隆

“Show and Tell” Activities in a College EFL Classroom  
—The First Step Toward Presentation in a Foreign Language—

Takashi KIMURA

## 1. はじめに

*Show and Tell* というのは、アメリカなどの幼稚園や小学校低学年において、母語である英語の時間に一般的に行われている言語活動のひとつである。児童に自分のお気に入りの物などを教室に持って来させ、クラスメートの前で、持参した物について数分間話させるのである。発表の後はクラスメートとの質疑応答が続く。

筆者が *Show and Tell* という言葉を初めて耳にしたのは、1970年代後半、障害児教育を学ぶためにアメリカの大学院に留学していた時のことである。小学校レベルにおける言語指導についての授業の中で、*Show and Tell* という言葉に初めて出会った。この言葉の意味は前後関係から容易に推測できるものであったが、このような一種のスピーチ活動が初等教育の「定番」になっていることに、新鮮な驚きを覚えたことを記憶している。アメリカ人が口頭での自己表現に長けているのは、幼い頃からのこのような言語教育によるところが大きいのであろうと、ひとり納得したものである。

*Show and Tell* について Baskin (1994) は次のように述べている。

American kindergartens and the first few years of grade school use Show and Tell as a language activity. Students can practice public speaking using familiar things in their lives. They speak as individuals, but gain group cohesiveness through sharing their interests. Through Show and Tell they practice speaking for long turns. (p. 76)

これを読むと、*Show and Tell* は、ある程度の長さの口頭発表を一人で行うための練習と考えられていることがわかる。

*Show and Tell* はもともと英語を母語とする児童のための言語活動であるが、その教育的意義は外国語を学ぶ大学生学習者に対しても等しく当てはまる。自分に関わりの強い品物を見せながら話せば、その品物が話題を整理したり思い出したりする上での手がかりとな

り、外国語での口頭発表を容易にすると予想されるからである。同時に、品物を見せながらの発表は聞き手に対しても興味をより強く喚起し、外国語を聞き取ろうとする意欲を向上させるであろう。品物をはさんで話し手と聞き手が興味・関心を共有することにより、教室における外国語での質疑応答が、より一層意味のあるコミュニケーション活動となる。オーラルコミュニケーション能力の養成を求められている現在の外国語教育、とりわけ英語教育において、**Show and Tell** は格好の学習活動を提供するものと考えられる所以である。

一方、社会・経済のあらゆる場面で世界規模の交流が進むにつれ、外国語プレゼンテーション技能は、すべての大学卒業生に求められるようになってきている。大学審議会は平成10年10月の文部大臣答申において、「……国際社会で信頼され、尊敬される人材として知的リーダーシップを発揮できる人材を育成するためには、討論、口頭による意見発表や報告、プレゼンテーション等の訓練を通じて自らの主張を明確に表現する能力を育成する必要がある」(pp.45-46)と述べている。今や大学での外国語教育においては、単なる個人間の意思疎通にとどまらない、プレゼンテーション技能の養成に至る指導内容が求められていると考えてよい。

プレゼンテーションという言葉はもともと広告業界の用語であり、情報・知識 imidas 1998ではこの言葉を、「広告取引に当たり、広告アイデアの説明、広告キャンペーン展開などの計画案を提出し、直接説明すること」(p. 261)と定義している。現在では広告業界にとどまらず、ビジネス現場の全般において、OHP やスライドなどの視覚資料を併用して企画書の説明や提案などを行うことを、プレゼンテーションと呼んでいるようである。

視覚資料を用いての口頭発表がプレゼンテーションであるならば、それは基本的に **Show and Tell** の一種と言えなくもない。ビジネス現場のプレゼンテーションのように聞き手の説得を目指すわけではないが、スピーチ部分の構成や準備の仕方、効果的なプレゼンテーションのための技法などは、ほとんどそのまま **Show and Tell** にも当てはまる。**Show and Tell** は、大学卒業生に求められる英語での実務能力のひとつ、すなわち英語プレゼンテーション能力を養うための学習活動の第一歩となり得ると考えた次第である。

筆者は、以前勤務していた肢体不自由養護学校中学部および高等部の英語授業において、一部 **Show and Tell** を織り交ぜた授業を試みた。限られた環境の中で、なるべく真正に近い双方向のコミュニケーション活動を実現しようとしたからである。またその後勤務した工業大学の英会話授業においては、**Show and Tell** が英語プレゼンテーション技能養成の基礎的な活動になると考えて、**Show and Tell** を主体とする授業を5年間実践した。さらに、非常勤講師として勤務した外国語大学において、英語専攻生対象の英会話授業に **Show and Tell** を取り入れたこともある。本稿では、筆者による工業大学での最近の **Show and Tell** 利用事例を紹介し、そこでの5年間の授業実践を顧みてその教育的意義を考察する。

## 2. 工業大学における最近の利用事例

筆者は平成10年度前期開講の外国語科目「English Speaking II」において、**Show and Tell** を中心とする授業を行った。「English Speaking II」は2年生対象の選択科目で、1年生後期開講の「English Speaking I」の後に続く科目である。この科目では、日常生活で使用される口語表現に習熟させ、平易な表現を用いて自分の考えなどを相手に話すことのできる能

力の育成を主な目的としている。選択科目ではあるが、英会話に対する学生の関心は極めて高いため、毎年2年生のほぼ全員がこの科目を履修している。

本科目は1クラスを日本人教師と英語ネイティブスピーカー教師の二人で担当する、一種のティームティーチングのスタイル（concurrent team teaching）で授業を進めている。1クラスを2グループに分けて別々の教室を配当し、それぞれのグループの学生は1コマの授業（90分）の前半あるいは後半で日本人教師の指導を受け、残りの時間はネイティブスピーカーの指導を受けるわけである。このような授業設定をすると、クラスサイズは1クラスあたり15～17名となる。平成10年度前期には、筆者はこのようなサイズの「English Speaking II」を4クラス（各45分）担当した。

### 3. Show and Tell を支える学習活動

筆者は本科目に先行する「English Speaking I」において質問表現や応答表現に重点を置いた授業を行っており、そのため本科目は「English Speaking I」で学習した質問表現・応答表現の実際使用の場としての性格も帯びている。*Show and Tell* 発表の後の質疑応答は、定型的に学んだ質問表現を発表内容に合わせて応用していくという点において優れた場になると考えているからである。したがって、「English Speaking I」で使用したテキスト（酒井, 1995）や筆者作成のプリント類は、復習用教材としてペアワークの形で継続使用した。また、学習者が英語で自主的に発言したり質問したりする度に発言点を付与して学習参加を促し、併せて累積的成績評価のための資料とする、「ポイント・トークン」システムも継続して実施している。（「ポイント・トークン」システムの詳細については木村（1998）を参照）

### 4. 授業の実際

#### 4.1 事前指導

「English Speaking II」は英語スピーチについての講義科目ではない。あくまでも、英語による発表と質疑応答を通して、英語スピーキング能力の基礎を身に付けることを主たる目的とした科目である。そのため、スピーチ理論についての講義は必要最小限にとどめ、履修者全員が少なくとも学期に1回は*Show and Tell*発表を行うことができるよう配慮している。しかしながら、履修者のほとんどは英語を使って人前で話した経験を持たず、また母語ですらスピーチに類する活動を行っていないのが現状であるため、平成10年度前期に予定された14回の授業のうち、初めの3回を事前指導にあてることにした。前述のとおり「English Speaking II」では、筆者と英語ネイティブスピーカーの二人が1コマ（90分）の授業時間を半分に分けて担当しているため、事前指導に充当した時間は合計135分となった。3回の事前指導で取り扱った主な内容は、①*Show and Tell*についての説明、準備や練習の仕方（資料1参照）②モデル発表のビデオ録画視聴③スピーチについての基礎知識④スピーチの構成法⑤評価の観点と評価基準（資料1・2参照）⑥コミュニケーション方略、等である。

スピーチの基礎知識に関しては、Harrington & LeBeau (1996) を参考にして、主として

スピーチに含まれる3種のメッセージ (story message, physical message, visual message) とそれらの効果的な使い方について述べた。スピーチ原稿の構成法に関しては, introduction, body, conclusion の三分法とスムーズな transition の重要性について説いた。また, コミュニケーション方略については Bialystok (1990) および Dornyei & Thurrell (1991) に基づき, 特に質疑応答において言葉に窮した場合の対処法, すなわち, 言い換え (semantic contiguity, approximation, circumlocution)・身振り言語の利用 (mime)・理解の確認 (confirmation check)・説明や情報の要求 (clarification check)・繰り返しの要求 (request for repetition) などの方略について説明し, その有用性を強調した。

本科目の *Show and Tell* では, 聞き手 (聴衆) となった学習者があらかじめ定められた評価基準に基づいてクラスメートの発表を評価する。これはクラスメートの発表を批判的に聞くことによって, 効果的なプレゼンテーションのあり方について考察を深めることができると考えているためである。評価の観点とは, ①Preparation (準備や練習は十分になされていたか) ②English (英語は聞いて分かりやすかったか——構成・表現・発音など——) ③Delivery (視線・表情・声の調子などは有効に使われていたか) ④Interest (興味をそそる内容だったか) の4点に限定した。聞き手となった学習者には, これらの観点について1から5までの評点で評価させた。評価の観点をこれら4点に絞り込んだのは, 学習者のスピーチに関する知識や評価能力を考慮したためである。また本科目では, 聴衆による評価結果を成績資料の一部としても用いている。そのため事前指導の期間中にモデル発表のビデオを全員で視聴し, 教師と学習者の評価結果を比較することによって, 評価基準についての確認と意見交換を行った。

本科目の *Show and Tell* では, 発表の司会, 質疑応答の進行なども全て学習者が英語で行うことにしており, 受講者全員に輪番で担当させている。これは役割を分担させることによって, 学習者に英語を話す機会をできるだけ多く持たせることができると考えているからである。司会や質疑応答の進行は定型的な「雛型」を教師が用意し (資料3), 事前指導において解説と練習を行った。

#### 4.2 発表と質疑応答

平成10年度の「English Speaking II」では, 4クラスの受講者 (合計63名) がそれぞれ自由にテーマを設定し, 各自1回ずつの発表を行った。ただし, 最終回の授業までに全員が発表を終了したので, 希望者に対しては2度目の発表をさせた。発表内容は同一でもよいこととし, 成績資料には2回の評価結果のうち優れた方を採用することとした。2度目の発表を希望したのは2名であった。

平成10年度「English Speaking II」における主な発表テーマは表1のとおりである。

表中で「出身企業の業務内容に関するもの」というテーマが含まれているのは, 本工業大学には社会人学生が多数在籍していることに由来する。これらのテーマの他にも, アルバイトに関するもの, 楽器演奏や算盤など特技に関するもの, 国際キャンプや川下りなど特殊な体験に関するものなどがあった。図1は愛用のマウンテンバイクをLL教室に持ち込んで自転車旅行の思い出を語る受講生の様子, また図2はインターハイでの優勝写真を見せながら, 誇らしげに自分の野球歴を語る受講生の姿である。過去の *Show and Tell* で聴衆の興味を強く引いた発表には, そば打ちの実演や, 発表者自身が担ぎ手として観光ポス

表1 平成10年度「English Speaking II」での主な発表テーマ

テーマ	人数(名)
スポーツの経歴や入賞に関するもの	15
自分のコレクションに関するもの	7
出身企業での業務内容に関するもの	4
自分が出場した自動車レースに関するもの	4
旅行の思い出に関するもの	4
所有しているオートバイや車に関するもの	3
釣りに関するもの	3



図1 自転車旅行の思い出を語る受講生

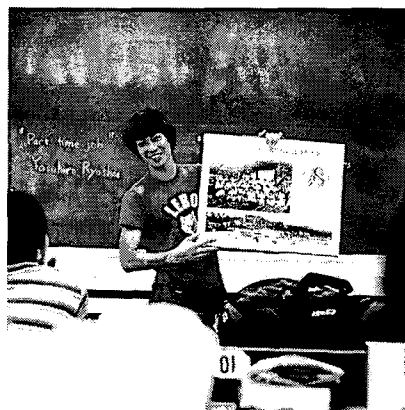


図2 自分の野球歴を語る受講生

ターのモデルにもなっている手筒花火、パネル写真を見せながら語った家業の割り箸生産などがある。

筆者は合計5年間にわたる *Show and Tell* の実践のうち、4年間分の発表をビデオカメラで録画した。これは、特に優れた発表があれば折を見て4クラス全体で相互に視聴し、クラスディスカッションの材料とするためである。また過去の発表者全員のビデオテープをLL教室に置いて、各自がいつでも自由に自分や他人の発表を視聴できるようにしている。発表をビデオ録画することのもう一つの効用は、これによって学習者の自己表現欲が大いに強化されることである。多かれ少なかれテレビタレントに憧れを抱く最近の大学生は、ビデオカメラが向けられたとたんに、普段の印象からは想像できないほどの表現力を発揮することがある。ビデオカメラによる録画は英語授業の雰囲気を新鮮で生き生きとしたものにし、好ましい緊張感を生み出すと考えている。残念ながら平成10年度はビデオ機材が故障したため、代替手段として通常の写真カメラで一人2カット程度ずつ撮影した。撮影した写真は筆者から一人ずつ発表者に手渡し、写真を見ながら主として発表の非言語面についてコメントを伝えた。

## 5. 学習者による授業評価

教師がいくら「良かれ」と思って授業を計画・実施していても、学習者がその授業を教師の期待どおりに受け止めていなければ学習効果は上がらない。教師は常に学習者の声に対して敏感であらねばならないと筆者は考えている。そこで、次の4点に関して受講生全員の意見や感想を聞くことにした。

まず第1に、*Show and Tell* を自分で行ってみてどう感じたか、ということである。*Show and Tell* は準備に費やさなければならぬ時間や労力の点だけでなく、発表に関わる精神的なプレッシャーの点においても比較的負荷の大きな学習活動である。受講生達は、そのような *Show and Tell* の準備に積極的に取り組んだのかどうか。また発表を終えた後には、その努力が報いられたと感じたのかどうか。さらに、受講生は発表やその準備がスピーキング能力の向上に結びつくと感じたのかどうか。第2には、クラスメートの発表を聞くことをどう思ったか、ということである。*Show and Tell* を中心とした授業では、自分が発表する時以外は必然的に他人の発表を聞く立場に置かれる。このような立場での授業を価値ある時間と受け止めたかどうかが。第3は、発表者に英語で質問をするということに関してである。本授業が「English Speaking I」で行った「英語での質問の仕方」の現地練習の場であったことを考えると、この点をどう受け止めたかは重要である。4番目は、受講生同士の相互評価についてである。クラスメートの発表を適切に評価できたと考えているのかどうか、また、本科目の成績の出し方をどう思っているのか。

このような観点から、資料4に示すような記述式アンケート用紙（無記名）を作成し、平成10年度「English Speaking II」の授業が終わった直後、受講者全員（63名）に対して実施した。回収率は100%であり、質問の趣旨の取り違えがごく少数あったことを除けば、回答内容も有効なものであった。以下の集計結果は、アンケート回収後、自由記述式の回答をいくつかの回答カテゴリーに分けてコーディングしたものである。評価結果を把握しやすくするため、カテゴリー化した回答をさらに、質問に対して肯定的なもの、否定的なもの、およびその他の回答にまとめ、回答全体に対するそれぞれの割合を算出した。

### 5.1 自分自身の発表に関して

#### (1) 「準備はできたか」

肯定的回答（とてもよくできた・できた・大体できた、等）	42名（67%）
否定的回答（あまりできなかった・できなかった、等）	13名（21%）
その他の回答	8名（13%）

この問いに対しては、肯定的回答が3分の2を占めた。「1週間ほどかけて準備した」や「2日間くらいかけた」「発表の朝完成した」という回答もあったが、これらの回答は、「肯定的」と捉えるか「否定的」と捉えるかが困難であるため、「その他の回答」に分類した。多くの受講者は教師の要求に応じて発表準備に取り組んだようだが、「準備したつもりだったものの、当日はうまく行かなかった」と答えた者が2名いて、周到的な準備が必ずしも満足のかゆく発表につながらなかったことも示されている。

#### (2) 「達成感があったか」

肯定的回答（非常にあった・あった・それなりにあった，等）	39名（62％）
否定的回答（あまりなかった・今ひとつ・なかった，等）	19名（30％）
その他の回答	5名（8％）

やはり肯定的な回答が3分の2近くを占めている。このように答えた者の中には、「終わった時はとても感激した」とコメントを添えた者もいる。英語でのプレゼンテーションという、これまで経験したことのない課題を成し遂げた後には一種の感動が残るようである。一方、「達成感がなかった」と答えた者の中には、「簡単な英語しか使っていないので」とその理由を添える者もいた。「自分が使いこなせる範囲内の英語を駆使して」というのは、指導者である筆者のアドバイスでもあったのだが、失敗を恐れるあまり、自ら必要以上に表現を限定してしまった受講者には物足りなさが残った可能性もある。また、「その他の回答」の中には、「達成感よりも、もっと練習しておけばよかったという後悔を感じた」というものがあり、*Show and Tell*を経験することによって、口頭発表における練習の重要性を認識することがあることも示された。

(3)「以前と比べて、人前で話すことに慣れたか」

肯定的回答（はい慣れた・少し慣れた・恥ずかしくなくなった，等）	39名（62％）
否定的回答（大して変わっていない・まだ慣れない，等）	18名（29％）
その他の回答	6名（10％）

1度の発表経験だけでスピーチに慣れさせるなどとても期待できることではないが、それでも3分の2近くの受講者が、「以前と比べて人前で話すことに慣れた」と答えている。これは、実際に人前で話すことを体験したことに加えて、毎回の授業でクラスメートの発表を聞いたことにもよると考えていいのではないだろうか。スピーチ発表が日常化した授業に参加しているうちに、人前で話すということがある程度自然な行為として受け止められるようになったことが考えられる。

(4)「以前と比べて、英語を話す能力が向上したと思うか」

肯定的回答（はい・多少向上した・少し向上した，等）	35名（56％）
否定的回答（いいえ・あまり変わらない，等）	22名（35％）
その他の回答	6名（10％）

肯定的な回答が半数を上回ってはいるが、否定的な回答も全体の3分の1以上を占めている。前問同様、1度のスピーチ体験だけで英語を話す能力が急激に向上することは期待すべきではないが、同じスピーチを何度も練習することによって発音の流暢さ等を向上させることは可能である。このような練習効果について、もっとよく説明すべきだったのかも知れない。

(5)「今後改善した方がいいと思う点」

特にない・今のままでよい	25名（40％）
無回答	30名（48％）
その他の回答	8名（13％）

現状では特に大きな問題点はないと考えている受講者が多数を占めているようである。

「その他の回答」の中には、発表が学籍番号順であったことに対する不満や、より小さなクラスサイズを求める要求などがあった。また *Show and Tell* の意義を認めながらも「準備が大変すぎる」とコメントする者もいた。*Show and Tell* をなくした方がいいという意見は1名が出していたに過ぎず、全体的には概ね支持されていると考えられる。

## 5.2 クラスメートの発表を聞いて

### (1) 「理解できたか」

肯定的回答（できた・大体できた・まあまあできた、等）	51名（81％）
否定的回答（単語が難しかった、等）	5名（8％）
その他の回答	7名（11％）

「理解できた」と答えた者の割合が圧倒的に大きい。これは、事前指導において、聴衆の理解を第一に考えるよう強調したことの成果なのであろう。自分が使いこなせる範囲内の英語でスピーチを組み立てれば、聴衆に対しても語彙の負担を必要以上にかけることがない。「理解できなかった」と答えた5人が等しく単語の難しさを訴えていたのは、このことの裏返しである。「その他の回答」はすべて、「よく理解できた発表とあまりよく理解できない発表があった」というものである。

### (2) 「楽しかったか」

肯定的回答（非常に楽しかった・面白いものが多かった、等）	52名（83％）
否定的回答（興味の持てるものが少なかった、等）	2名（3％）
その他の回答	9名（14％）

大多数の受講者が「楽しかった」と答え、「意外な面を知ることができた」「それぞれテーマが違って興味を持てた」等のコメントを添えている。もちろん、個々の受講者の興味が様々であることも確かで、「その他の回答」の中の6件は、「自分が興味を持っているテーマのものは楽しかったが、興味がないものは楽しくなかった」というものであった。

### (3) 「語彙や表現で参考になるものがあったか」

肯定的回答（たくさんあった・あった・少しあった、等）	33名（52％）
否定的回答（あまりなかった・特になかった、等）	24名（38％）
その他の回答	4名（6％）
無回答	2名（3％）

肯定的な回答と否定的な回答がかなり拮抗している。他の質問に比べて否定的な回答が多く出されていたのは、やはりスピーチ自体をできるだけ平易な語彙・表現を用いて作るよう指導してきたことに起因していると思われる。事実、「平易な表現が多かったのであまり参考にならなかった」と率直に理由を述べた者もいる。わかり易さと、スピーチ聴取を通しての語彙・表現の習得とは、ある程度トレードオフの関係にあるのかも知れない。しかし回答者の一人が述べているように、上手な発表からは、難しい内容をいかに簡単な語を使って表現するかを学ぶこともできるはずである。参考になった事柄として具体的に挙げられていたものには、このような「難しい概念の説明の工夫」の他に、「ジェスチャーの効果や重要性」などがあった。



(4)「英語の聞き取り能力が向上したと思うか」

肯定的回答（はいそう思う・かなり向上した・少し向上した，等）	39名（62％）
否定的回答（いいえ思わない・あまり変わらない，等）	17名（27％）
その他の回答	7名（11％）

3分の2程度の受講者が「向上した」と答えている。「その他の回答」7件の内訳は、すべて「わからない」というものであった。そのうち2件については、「日本人の英語なので理解できたが、これで本当に聞き取り能力がついたのかどうかはわからない」とのコメントが添えられている。また「向上したと思わない」という回答の中にも、「簡単な英語だし native speaker じゃないので、あまり変わっていないと思う」というコメントがあった。平易な英語で話すように指導された *Show and Tell* は、聞き手にとって理解しやすかった半面（第5章第2節(1)の項参照）、authentic なインプットを求める学習者にとって上達の手応えを感じさせないものだったのかも知れない。

(5)「今後改善した方がいいと思う点」

特にない・今のままでよい	22名（35％）
無回答	32名（51％）
その他の回答	9名（14％）

「今のままでよい」という意見の中には、「他人の発表を聞いていてとても楽しかったから」という理由の付されているものがあつた。「その他の回答」としては、「もっと小人数の方が活気が出る」「女子と男子では興味の持てる内容が違う」「メモを取りながら聞くよう指導するとよい」「自分が発表した後はどうしても受身の態度になってしまう」等の意見や感想が出されていた。また、第5章第1節(5)の項で、*Show and Tell* をなくした方がいいと答えた受講者は、こちらの質問でも同様に答えていた。口頭での自己表現活動にどうしても馴染めない学習者は常に少数存在する。このような学習者にどう対応するか、今後も検討を続ける必要がある。

### 5.3 英語で質問することに関して

(1)「質問をしようと努力したか」

肯定的回答（した・頑張った・できる限り努力した，等）	58名（92％）
否定的回答（しなかった・あまりしなかった，等）	5名（8％）

圧倒的多数の受講者が、「努力した」と答えている。これは当然、英語での積極的な発言が成績評価に反映されるという本科目の評価方法（第3章参照）と深く関係しているはずである。本アンケート対象者の中で最もよく質問した人は、1学期間に8～10回行われた *Show and Tell* 授業で合計13回の質問をしている。受講者一人あたりの平均質問回数は7.1回であった。授業時間の関係で質疑応答の時間が4分間に限られていたことを考えれば、かなり活発なやり取りがあつたと言って差し支えないだろう。

(2)「英語で質問することに慣れたか」

肯定的回答（慣れた・かなり慣れた・以前より慣れた，等）	46名（73％）
否定的回答（慣れていない・あまり変わらない，等）	14名（22％）

その他の回答

3名 (5%)

成績のためとは言え、英語で質問をしようと1学期間努力したことが、「慣れ」につながっていることが窺われる。「慣れた」と答えた受講者は7割以上に上っている。もちろん「変わらない」と答えた人もいるが、その人達の理由は、「単語や表現が思いつかなかった」「いざ質問するとなると、語彙が足らなくてうまくできなかった」というものであった。質問の仕方については「English Speaking I」の授業で毎回練習を行い、また単語等が思いつかない時のコミュニケーション方略については *Show and Tell* の事前指導で取り扱ったが、これらの知識や技能に関しては、さらに定着を図ることが必要と考えられる。

(3)「英語で質問する能力が向上したか」

肯定的回答 (向上した・少しは向上した・コツはわかった, 等)

36名 (57%)

否定的回答 (全然・変わらない・質の向上はしていない, 等)

22名 (35%)

その他の回答

5名 (8%)

前の項で、「英語で質問することに慣れた」と答えた受講者が比較的多かったにもかかわらず、こちらの質問で「英語で質問する能力が向上した」と答えた者はさほど多くなかった。このような相反する応答もまた、本科目での評価方法と関係している可能性がある。すなわち、良い成績を取るために積極的に質問するよう努力はし、その結果英語で質問することにある程度慣れた。しかし、能力が向上したと思えるほどの実感はまだない、という意味の回答であったことが考えられる。能力の向上を実感させるには、このような質疑応答を含む授業を、さらに長期間にわたって実践する必要があると思われる。

(4)「ポイントカードは励みになったか」

肯定的回答 (大いになった・励みになった・少しはなった, 等)

41名 (65%)

否定的回答 (ならなかった・いいえ, 等)

17名 (27%)

その他の回答

5名 (8%)

前述のとおり、ポイントカード (以後ポイント・トークンと呼ぶ) というのは、受講生が英語で自主的に質問をする度に筆者が手渡したカードのことである。受け身になりがちな「聞き役」に対しても積極的な学習参加を促し、同時に、授業中の発言量をできるだけ公平に評価することを目指している。このようなポイント・トークンに対して、3分の2の受講者が「励みになった」と答えている。ただ、「励みにならなかった」と答えた受講者の中には、「質問をしなくてはと思い、余計に重荷になった」と述べた者が2名いた。木村 (1998) でも報告したように、無口な性格の学習者は、周囲の学習者が活発に発言し教師から得点カードを獲得しているのを見ると、必要以上に不安感を駆り立てられるようである。更なる検討を要する点であろう。

(5)「今後改善した方がいいと思う点」

特にない・続けてほしい

21名 (33%)

無回答

35名 (56%)

その他の回答

7名 (11%)

改善を希望した受講者の数は、全体から見れば多くはない。改善すべき点として挙げら

れていた事柄のひとつは、「発表テーマを事前に聴衆に知らせておく」というものであった。これまでの授業実践ではテーマは当日発表でよいことにしていたが、確かに事前に知らせておけば、聴き手はあらかじめ内容を予想して質問を考えておくことができる。また、「質問の少ない人にはもっと努力させるべきだ」という意見や、「質問内容によって発言ポイントに差をつけてほしい」という意見も出されていた。「ポイントシステムは不要」という意見を出したのは2名であった。

#### 5.4 評価票に関して

##### (1) 「適切に評価できたと思うか」

肯定的回答（できたと思う・大体できた・まあできた、等）	44名（70％）
否定的回答（いいえ・そう思わない・難しかった、等）	16名（25％）
その他の回答	3名（5％）

前述のとおり本科目では、聞き手となった受講生に評価票（資料2参照）を配布して発表者の *Show and Tell* を評価させたのだが、そのような評価を「適切に行うことができた」と考えている受講者が全体の7割を占めていた。スピーチの評価は専門家にとっても決して易しいものではないが、評価の観点を少数の事項に絞り込んで適切な事前指導を施し、また初学者でも記入できるような簡便な評価用紙を準備することによって、受講生が「適切」と考える評価ができたようである。「適切に評価できなかった」理由として挙げられているものの中では、「その日の気分に影響された」や、「最初の発表者と最後の発表者で評価基準が違ってきてしまった」など、一定の評価基準を維持することの難しさを指摘するものが多かった。また、「自分が理解できない発表を評価することが難しかった」とのコメントもあった。これは極めて当然のことであり、学習者による相互評価の限界はこの点にあるものと思われる。

##### (2) 「発表者に評価結果やコメントを知らせた方がいいか」

肯定的回答（はい・その方がいい・そうしてほしい、等）	38名（60％）
否定的回答（いいえ・ない方がいい・特に必要ない、等）	17名（27％）
その他の回答	8名（13％）

平成10年度「English Speaking II」では、受講生間の評価の一貫性と公正を保つために、記入済みの評価票を発表者に見せることをしなかった。しかし発表を終えた者にとっては、自分の発表がどれほどの評価を得たのか気になるところであろう。事実、「わかるようにしてほしい」と答えた者の中には、「みんなが理解してくれたかどうか、またどれくらい興味を持ってくれたのか不安だった」と書き添えた者がいる。アンケートの結果、6割の受講生が「評価結果やコメントを知りたい」と思っていることがわかった。プレゼンテーションに対するフィードバックは、学習者のその後の発表を改善していく上でも有益である。評価者の名前が出ないように配慮した上で、評価結果やコメントを発表者本人に知らせることが望ましいであろう。ただし、「必要ない」と答えた者の中には、「自分でわかっているのではいけない」という意見や、「希望者のみでよい」という意見もあった。

##### (3) 「成績評価方法は妥当だと思うか」

肯定的回答（そう思う・良いと思う，等）	52名（83％）
否定的回答（思わない・あまり思わない，等）	7名（11％）
その他の回答	4名（6％）

本科目では，発表者それぞれに対して，聞き手となった受講者全員の評価点の平均（20点満点）を算出し，それに教師による評価点（20点満点）を加算して「発表」に対する最終評価点とした。受講者にも評価過程の一端を担わせることで，彼らのより主体的な授業への取り組みを図る一方，受講者による相互評価の限界を考慮してこのような評価点算出方法を採用したわけである。この方法に対しては，大多数の受講者が支持を表明している。

「その他の回答」に分類した意見の中には，「教師の評価点の比重を重くすべきである」というものが2件あった。しかし，本科目の成績評定は，*Show and Tell*での発表の他にもさまざまな要素の得点を加えて行われるため，受講生の相互評価が科目成績の最終評定点に占める割合は極めて小さなもの（7.5％）となる。このことを考えれば，評定点算出の手続きを一層煩雑にしてまで教師の評価点の比重を重くする必要はないように思われるのだが，どうであろうか。

#### (4)「今後改善した方がいいと思う点」

特にない・このままでよい	23名（37％）
無回答	34名（54％）
その他の回答	6名（10％）

大半の回答が，「このままでよい」または「無回答」だったが，1名が「評価の観点の改善」を挙げていた。具体的な提案は書いてなかったが，振り返って考えてみれば，今回用いた評価票には確かに不備な点がある。品物など視覚資料を見せてスピーチを行うのが*Show and Tell*の特徴であるにもかかわらず，視覚資料をいかに効果的に利用したかについての評価が欠落しているという点である。今後は，視覚資料の有効利用を観点に含めた評価票を作成し，*Show and Tell*の評価に使用していかなければならない。

## 6. まとめと今後の課題

本稿では，工業大学における筆者の*Show and Tell*利用事例の概要について述べ，受講生による授業評価の結果を報告した。授業評価からは，*Show and Tell*を利用した授業が概ね受講者の支持を得ていることや，*Show and Tell*発表が外国語プレゼンテーション技能養成のための入門的活動として，さまざまな教育的意義を有することがわかった。また同時に，*Show and Tell*や本授業のあり方についての問題点もいくつか指摘された。

本稿の冒頭で筆者は，自分に関わりの強い品物を見せながら話すことは外国語での口頭発表を容易にする，と述べた。これは，目の前に置かれた品物が，発表者に対して話題を整理したり思い出したりする上での手がかりを提供すると考えられるからである。また筆者は，品物を見せながらの発表は聞き手にとっても興味をより強く喚起し，外国語を聞き取ろうとする意欲を向上させる，とも述べた。しかしながら，前者が「English Speaking II」受講生にとって真実であったかどうか，今回の調査で確かめることはできなかった。これを確認するためには，受講生に対して，同一のテーマで通常のスピーチと*Show and Tell*を

行わせ、それぞれの場合の「口頭発表の難易度」を比較することが必要になるからである。「English Speaking II」では通常のスピーチも行わなかったし、アンケートで *Show and Tell* の難易について尋ねることもしなかった。今後、*Show and Tell* の教育上の効果についてより実証的な研究を行うのであれば、このような手続きを実験デザインに組み入れる必要がある。

ただ後者については、授業評価の設問を通してある程度確認できたのではないかと考えている。回答を集計した結果、「楽しかった」「面白かった」と答えた者が受講者の8割以上を占め、大学生学習者にとっても *Show and Tell* は楽しい学習活動であることが示された。受講生のコメントにあったように、*Show and Tell* を聞くと発表者それぞれの個性あふれる一面を知ることができる。今まで知らなかったことを *Show and Tell* を通して知ることができたならば、*Show and Tell* は十分に meaningful なコミュニケーション活動であったと言える。

外国語での表現活動、とりわけスピーチやプレゼンテーションは、聞き取りなどと比べて学習への主体的な取り組みが一層要求される。大学生学習者が、科目履修後も、また大学卒業後もこのような表現活動への学習意欲を持ち続けていくためには、最初の経験が好ましい印象を残すものでなければならない。この点に関しては、筆者の *Show and Tell* 授業はどうか合格水準に達したと言えるに過ぎない。自分自身の発表を振り返って、「発表の準備をすることができた」「達成感があった」「以前と比べて人前で話すことに慣れた」と感じた受講生は全体の6割強である。事前指導の内容を改善するなどして、より多くの受講生が初めての発表体験を肯定的に受け止められるようにしていく必要がある。

日本人学習者が発表を行いそれを日本人学習者が聞くという、今回のような外国語科目内での *Show and Tell* については、コミュニケーション活動としての真正度 (authenticity) を問う声も上がった。授業担当者である筆者は、教師を含めた授業参加者がすべて日本人という限られた環境の中で、なるべく真正に近い双方向のコミュニケーション活動を実現しようと努めたつもりだが、学習者は必ずしもこのような日本人同士のコミュニケーション活動を真正なものと受け止めていなかった。しかし、これからの英語コミュニケーションは常に英語のネイティブスピーカーと交わすとは限らない。コミュニケーション活動が真正かどうかは、誰とコミュニケーションを交わすのかということよりも、どのような場や状況で情報をやり取りするのかによると考えるべきであろう。この点についても、事前指導で十分に説明し、学習者の理解を促す必要がある。

今回の報告では、プレゼンテーション技能養成の第1歩としての *Show and Tell* について述べたが、引き続いて学習者を次のステップに進ませることも、もちろん可能である。受講生がすべて企業派遣の社会人学生だった時には、続く科目の *Show and Tell* を統一テーマのもとに行わせ、各自の在籍している企業の概要と主要製品を説明させた。また別の年には、統一テーマを「日本の事象の紹介」にしたこともある。いずれの場合も聞き手には外国人を想定し、外国人に理解しやすい発表を工夫させた。また聞き手となった受講生には、外国人の視点を考慮に入れた質問を考えるよう指導した。このようにテーマや状況設定を変化させることにより、*Show and Tell* は大学卒業後の国際業務に直結したプレゼンテーション練習や異文化間コミュニケーションのトレーニングにもなり得る。

前述したように *Show and Tell* は、教師が学習者一人ひとりをより深く理解する上で、ま

たとな機会を与えてくれる。大学外国語教育での実践例はさほど多くはないと思われるが、プレゼンテーション活動としてのみならず、学習者相互および学習者・教師間のコミュニケーション活動としても幅広い可能性を持った *Show and Tell* を、もっと大学での外国語教育に生かしていきたいものである。また同時に、その教育効果についても今後実証的な検討が加えられ、教育技法としての有効性が確立されることを期待したいと思う。

### 引用文献

- Baskin, R. S. 1994 Expanding English through personal experience: Show and tell in the classroom. *The Language Teacher*, 18 (10), 76-79.
- Bialystok, E. 1990 *Communication strategies: A psychological analysis of second-language use*. Cambridge, MA: Basil Blackwell.
- 大学審議会 1998 21世紀の大学像と今後の改革方策について——競争的環境の中で個性が輝く大学——（答申）大学審議会
- Dornyei, Z. & Thurrell, S. 1991 Strategic competence and how to teach it. *ELT Journal*, 45 (1), 16-23.
- Harrington, D. & LeBeau, C. 1996 *Speaking of speech: Basic presentation skills for beginners*. Tokyo: Macmillan Language House.
- 情報・知識 imidas 1998 1998 集英社
- 木村 隆 1998 ポイント・トークンの利用による教室内での発話促進 英語教育, 47(6), 30-32.
- 酒井一郎 1995 私から話しかける英会話質問ノート 南雲堂フェニックス

### 資料1 Show and Tell について

#### ■Show and Tell とは？

——文字通り、自分の持ち物を聴衆に見せて (show)、それについて英語で語る (tell)、という一種のスピーチ活動です。自分の信念等について語る一般的な「演説」とちがって内容が具体的にになりますので、話し手にとっても聴き手にとっても、より易しくて楽しみ易い活動といえます。

#### ■何を見せるか？

——どんなものでも構いませんが、必ず見せる物を用意して下さい(黒板に絵を描くのはダメ)。趣味で収集しているコインやミニカーなどは聴衆の関心を引くでしょうし、海外旅行の経験のある人なら、その時の写真やパンフレットなども面白いでしょう。かつて授業で発表された *Show and Tell* の中には、自分で描いた教員の似顔絵や、インターハイで入賞した時のメダル、実演をまじえたギター演奏、自作ロボット、特製お好み焼の作り方などについて話し、拍手喝采を浴びたものがありました。聴衆が興味を持ちそうなものを選んで話すのがよいでしょう。

#### ■誰に話すのか？

——教室内の聴衆はクラスメートと先生です。しかし、英語で話す時は「日本人以外の人聴いてもよくわかる」を基本方針としましょう。つまり、ウケを狙って日本人にしかわからないようなジョーク、例えば流行語やTV コマーシャルを英訳して入れたとしても、日本人以外の人にとっては面白くも何ともありません。また日本特有の風物、例えばお盆やおみくじ、こんにゃくやお餅などについて触れる時は、それらを知らない人でも大体どんなものであるかがわかるような表現方法を考え出さねばなりません。和英辞典だけに頼らず、自分の知っている英語を駆使して表現を工夫することが大切です。

#### ■発表の長さは？

——2分以上、4分以内とします。必ず十分にリハーサルを行って、時間内に収まることを確認しておいて下さい。また、実演等を入れる場合には、英語での解説が少なくとも2分以上になるように注意して下さい。授業進行の都合上、4分間が経過したら速やかに終了していただきます。

#### ■原稿は暗記？

——原稿(アウトライン)の準備は必要ですが、それを読んでしまっただけではいけません。話の面白さが半減してしまいますから。内容を忘れないコツを教えましょう。それは、見せる物を準備する時、こっそりどこかに英語で書いた見出し(メモ)を付けておくことです。話す順番を書いておいてもいいでしょう。見出し(メモ)や順番を参考にして、棒暗記ではなく、自分の「話し言葉」で話すのが一番魅力的だと思います。

#### ■評価の観点は？

——次の4点について、聴衆全員で評価します。

- 準備：準備や練習は十分になされていたか
- 英語：英語は聞いて分かりやすかったか(構成・表現・発音など)
- 話しぶり：視線・表情・声の調子などは有効に使われていたか
- 興味：興味深い内容だったか

■原稿（アウトライン）の準備は？

——たとえ3分間のスピーチと言えども、原稿（アウトライン）の準備は必要です。それどころか、3分という短いスピーチだからこそ一層周到な準備が要求される、と言ってもよいでしょう。時間の限られたスピーチでは、事前によほど組み立てを考えておかないと、時間切れで言いたいことの半分も言えなくなってしまうことがよくあるからです。また、聞いている人にとっても、始めの部分だけが念入りで後半が省略されてしまっていては、全体がよく分からなくなってしまう。スピーチの構成についての講義を参考にして、ポイントを落とさず、かつ聞いていて分かりやすい原稿を準備して下さい。

■失敗した学生の弁

○日本語で原稿を書いてそれを英訳した。わからないところは和英辞典を引いた。

“いやー、難しい単語や表現がたくさんあったので覚えきれず、スピーチの途中で立ち往生してしまいましたよ。また、聞いている人も理解できなかったみたいで、シラけちゃってました”

[改善のためのヒント]

見せる物が決まったら、それについて出来るだけ自分の知っている英語で言ったり書いたりしてみる（難し過ぎて聴衆に通じない英語は使っても意味がない）。その英語を話の筋がよく通るように順序よく並べる。

\*どうしても難しい英語を使わないといけない時は、“It’s ～ in Japanese.” と説明を加える

資料2 Show and Tell 評価票

発表者氏名 \_\_\_\_\_

チェックポイント

評価（該当の評点を○で囲む）

○準備・練習は十分なされていたか	5 - 4 - 3 - 2 - 1
○英語はわかりやすかったか	5 - 4 - 3 - 2 - 1
○話しぶりは良かったか	5 - 4 - 3 - 2 - 1
○内容は興味深かったか	5 - 4 - 3 - 2 - 1

コメント

評価点合計 (       ) / 20

評価者氏名 \_\_\_\_\_



資料3 *Show and Tell* の発表と質疑応答等について

*Show and Tell* では、発表や質疑応答等の司会進行も受講生に担当していただきます。下の例を参考にして行って下さい。(事前によく練習しておくこと)

司会者：Now, let's watch and listen to the presentations. Today's first presenter is (発表者1).

The title of his/her presentation is (タイトル).

(発表者1), please.

[発表者1 登壇] Let's give him/her a big hand. [拍手]

発表者1：Hello, everyone. [発表始め] …… [発表終わり] Thank you.

司会者：Thank you, (発表者1). Now, are there any questions to him/her?

聴衆：[質問]

発表者1：[応答]

聴衆：I see. Thank you.

司会者：Any other questions? …… No questions?

All right. Thank you, (発表者1). Please give him/her a big hand again. [拍手] Now everyone, let's fill in the evaluation sheet. [全員が評価票を記入し終わるまで待つ]

Now, the next presenter is (発表者2). The title of his/her presentation is (タイトル).

(発表者2), please.

[発表者2 登壇] Let's give him/her a big hand. [拍手]

発表者2：Good afternoon, everyone. [発表始め] …… [発表終わり] Thank you.

司会者：Thank you, (発表者2). Now, are there any questions to him/her?

[質疑応答省略]

司会者：Any other questions? …… No questions?

All right. Thank you, (発表者2). Please give him/her a big hand again.

Now everyone, let's fill in the evaluation sheet. [全員が評価票を記入し終わるまで待つ]

Now, this concludes today's Show and Tell activity. Thank you.

計時 [教師が行う]

発表開始後 2 分経過：1 鈴

“ ” 4 分経過：2 鈴 [発表終了]

“ ” 8 分経過：1 鈴 [質疑応答終了]

資料4 「English Speaking II」授業アンケート（抜粋）

皆さんの協力のおかげで「English Speaking II」の授業も順調に進み、間もなく終盤を迎えようとしています。授業担当者としては、皆さんが楽しい雰囲気の中で英会話能力やプレゼンテーション能力を身に付けてもらえるよう工夫したつもりですが、まだまだ改善の余地があったことと思います。来学期以降の授業内容の改善のために、以下の点についてご意見をお聞かせ下さい。成績には一切関係しませんので、率直に答えて下さい。

■学習活動“Show and Tell”について

将来必要とされる英語プレゼンテーション技能を高めるために、また英語で質問するための話題を確保するためにこの学習活動を企画しましたが、いかがでしたか？

1. 自分の発表に関して

- (1)準備はできましたか
- (2)達成感がありましたか
- (3)以前と比べて、人前で話すことに慣れましたか
- (4)以前と比べて、英語を話す能力が向上したと思いますか
- (5)授業内容として今後改善した方がいいと思う点があれば、書いて下さい

2. クラスメートの発表を聞いて

- (1)理解できましたか
- (2)楽しかったですか
- (3)英語の語彙や表現で参考になるものがありましたか
- (4)以前と比べて、英語の聞き取り能力が向上したと思いますか
- (5)授業内容として今後改善した方がいいと思う点があれば、書いて下さい

3. 発表者に英語で質問することに関して

- (1)質問をしようと努力しましたか
- (2)以前と比べて、英語で質問することに慣れましたか
- (3)以前と比べて、英語で質問する能力が向上したと思いますか
- (4)ポイントカードは励みになりましたか
- (5)授業内容として今後改善した方がいいと思う点があれば、書いて下さい

4. 評価票について

- (1)適切に評価できたと思いますか
- (2)何らかの形で、発表者に評価結果やコメントがわかるようにした方がいいですか
- (3)学生による評価点（学生平均）と教師による評価点を合計して発表に対する成績とすることは、妥当な成績評価法だと思いますか
- (4)授業内容として今後改善した方がいいと思う点があれば、書いて下さい